

## 新約聖書 マルコによる福音書 6章 1節—13節（新共同訳）

<sup>1</sup> イエスはそこを去って故郷にお帰りになったが、弟子たちも従った。<sup>2</sup> 安息日になったので、イエスは会堂で教え始められた。多くの人々はそれを聞いて、驚いて言った。「この人は、このようなことをどこから得たのだろうか。この人が授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったい何か。<sup>3</sup> この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。」このように、人々はイエスにつまずいた。<sup>4</sup> イエスは、「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」と言われた。<sup>5</sup> そこでは、ごくわずかの病人に手を置いていやされただけで、そのほかは何も奇跡を行うことがおできにならなかった。<sup>6</sup> そして、人々の不信仰に驚かれた。

<sup>6</sup> それから、イエスは付近の村を巡り歩いてお教えになった。<sup>7</sup> そして、十二人を呼び寄せ、二人ずつ組にして遣わすことにされた。その際、汚れた霊に対する権能を授け、<sup>8</sup> 旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず、<sup>9</sup> ただ履物は履くように、そして「下着は二枚着てはならない」と命じられた。<sup>10</sup> また、こうも言われた。「どこでも、ある家に入ったら、その土地から旅立つときまで、その家にとどまりなさい。<sup>11</sup> しかし、あなたがたを迎え入れず、あなたがたに耳を傾けようとしめない所があったら、そこを出ていくとき、彼らへの証しとして足の裏の埃を払い落とさなさい。」<sup>12</sup> 十二人は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教した。<sup>13</sup> そして、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人をいやした。

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

## 説教「どこから得たか」

19世紀フランスの修道女であるリジューのテレーズは、こう記しています。

「愛がなければ、どんなわざも——死人をよみがえらせたり、多くの人びとを回心させたりするような華々しい行いでさえも、虚無にすぎないとわかりました」。

本日の福音書は、イエスが故郷に帰った場面から始まります。この時、イエスは、個人的な帰郷のためではなく、弟子たちと共に宣教のためにこの村を訪れました。

しかし、「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」という通り、故郷の人々はイエスを受け入れませんでした。

それからイエスは、付近の村を巡り歩いて宣教したあと、十二人の弟子たちを、初めてご自身の代理として伝道に派遣します。弟子たちの伝道内容は、「福音の宣教」と「悪霊の追放」であり、つまりイエスの働きと同じでした。

弟子たちを派遣するにあたり、イエスは弟子たちに「汚れた霊に対する権能」すなわち悪霊を追い出すことのできる大きな力を与えると共に、具体的な指示を与えます。

その指示とは、彼らは二人で一組になり「杖一本のほか何も持たず」必要最小限の持ち物で出かけていくようにということです。弟子たちに求められたのは「持つこと」ではなく「持たないこと」です。イエスの語った派遣とは、自分の持ち物を置いて、「持たざる者」としてその地に赴くことでした。

「旅には杖一本のほか何も持たず」の杖とは、神の導きと愛の象徴です。神の国、神の愛を人々に広めるには、神の導きと愛のみを頼りにすることが大切なのだということかもしれません。

コリントの信徒への手紙一 13 章 2 節にこうあります。「たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい」。

人々への伝道においても、最も大切なことは、その根底に愛があることなのです。

また、イエスは、「どこでも、ある家に入ったら、その土地から旅立つときまで、その家にとどまりなさい」と言いました。

それは、最初に泊まった家よりも、もっといい待遇で迎える家があっても、そちらに移ったりしてはならない、ということです。

最後にイエスは弟子たちに、平安を宣べ伝える言葉に耳を傾けようとしないう所があったら、足の裏の埃を払い落として、そこから立ち去ることをすすめました。

「人を裁くな。あなたがたも裁かれないためである」(マタイ 7:1) というイエスの教えにあるように、人を裁く言葉が禁じられていますが、受け入れない人々に対して宣べ伝える赦しの言葉、救いの言葉にもまた限界があります。弟子たちは、イエスから委託された自分たちの働きに、境界線を設けなければなりません。

キリストの弟子にとっては、他者との交流において、その権限も力も何ひとつ自分のものではありません。自己と他者との関係において生かされるものは、イエス・キリストとの交わりが持つ力のみです。

だからこそイエスの弟子は、キリストから罪を赦された者として、また、今からはただ神の愛によって生きる者としてのみ、他者と出会うのです。

イエスの弟子は、キリストと共に働く助け手です。イエスの言葉を担う弟子たちは、自分たちのわざに対するキリストからの確かな約束を受け取ります。

伝道するイエスの弟子たちが、彼らを受け入れる家に入って行くということは、イエス・キリストご自身が、共にそこに入って行くことでもあるのです。

弟子たちは、イエス・キリストと共に父なる神を人々にもたらしめます。それは、赦しと救いと命と幸福が人間に与えられることを意味します。それが、彼らの苦難と困難を伴うこともある奉仕と働きの報いであり、豊かに実を結ぶ果実なのです。

弟子たちは、自分たちが、人間の救いと赦しのために人々の家に入って行くことは、無益かつ空虚に終わることがないということ。それによって、たとえようもない大いなる賜物が人々に、そして自らにもたらされることを知ることが許されます。

ローマの信徒への手紙 8 章 29 節にこうあります。「神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められました。」

「キリストのように」なるとは、キリストの弟子に与えられた使命と賜物です。

イエス・キリストに自分という存在を完全に捧げる者は、キリストのかたちをその身に映し出し、神の子となり、神の似姿として、キリストと共に立ち、キリストと共に働き、キリストと共に体を横たえ、キリストと共に眠るのです。

生まれてから、この世の地上の生をまっとうするまでの、ひとりひとりの人間の人生があります。

究極のところ、人間にとって最も大切なこと、価値のあることは、能力があったり、才能があったり、人々への影響力があるなどのことよりも、その根底に愛があることではないでしょうか。

リジューのテレーズは、このようにも記しています。

「熱狂的な喜びのうちにわたしは叫びました。『おお、イエス、わたしの愛よ。わたしは天職をついに見つけました。わたしの天職、それは愛です』」。

先日、夢の中に赤い十字架が出てきました。

赤は、熱い血潮を表す色、聖霊の炎の色でもあります。

また赤は、愛を表す色でもあるでしょう。

私たちは、心の内に、聖霊の炎と愛を灯し続けながら、試みの時も喜びの時も、共に歩んで行きましょう。

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

旧約聖書 エゼキエル書 2章1節—5節（新共同訳）

<sup>1</sup>彼はわたしに言われた。「人の子よ、自分の足で立て。わたしはあなたに命じる。」<sup>2</sup>彼がわたしに語り始めたとき、霊がわたしの中に入り、わたしを自分の足で立たせた。わたしは語りかける者に耳を傾けた。<sup>3</sup>主は言われた。「人の子よ、わたしはあなたを、イスラエルの人々、わたしに逆らった反逆の民に遣わす。彼らは、その先祖たちと同様わたしに背いて、今日この日に至っている。<sup>4</sup>恥知らずで、強情な人々のもとに、わたしはあなたを遣わす。彼らに言いなさい、主なる神はこう言われる、と。<sup>5</sup>彼らが聞き入れようと、また、反逆の家なのだから拒もうとも、彼らは自分たちの間に預言者がいたことを知るであろう。

新約聖書 コリントの信徒への手紙 二 12章2節—10節（新共同訳）

<sup>2</sup>わたしは、キリストに結ばれていた一人の人を知っていますが、その人は十四年前、第三の天にまで引き上げられたのです。体のままか、体を離れてかは知りません。神がご存じです。<sup>3</sup>わたしはそのような人を知っています。体のままか、体を離れてかは知りません。神がご存じです。<sup>4</sup>彼は樂園にまで引き上げられ、人が口にすることを許されない、言い表しえない言葉を耳にしたのです。<sup>5</sup>このような人のことをわたしは誇りましょう。しかし、自分自身については、弱さ以外には誇るつもりはありません。<sup>6</sup>仮にわたしが誇る気になったとしても、真実を語るのだから、愚か者にはならないでしょう。だが、誇るまい。わたしのことを見たり、わたしから話を聞いたりする以上に、わたしを過大評価する人がいるかもしれないし、<sup>7</sup>また、あの啓示された事があまりにもすばらしいからです。それで、そのために思い上がることのないようにと、わたしの身に一つのとげが与えられました。それは、思い上がらないように、わたしを痛めつけるために、サタンから送られた使いです。<sup>8</sup>この使いについて、離れ去らせてくださるよう、わたしは三度主に願いました。<sup>9</sup>すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。<sup>10</sup>それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。

教会讃美歌 190 番「主のみ名によりて」1,2 節、236 番「いのちのことばは」1,2,3 節、256 番「すがたは見えねど」1,2,4 節、251 番「わがたま喜び」1,2,5 節、370 番「しずけき祈りの」1,2,3 節。